

「今日からアナタはメスガキセクサロイド」

※○ 内がシーン番号。

※セリフ」上の数字がバイノーラルの立ち位置番号です。

0

(1)

SE：電車の走行音

アナタ、痴漢ちかんをしている。

(2)

9 「細い腰こし、揺れるスカート、柔らかそうなお尻しり。手を伸ばせば、触ふれられる距離。
どことなく汗臭い満員電車の中で、ほのかに漂ただようう、若い女の子の甘い香り。

それはまるで、熟うれはじめた百合の花のよう。

いけないことだとは思いますが、アナタは重力に引き寄せられるようにして、
目の前の、セーラー服を着た女子校生のお尻しりへ、そろそろ手を伸ばしてしまう」

(3)

2 女の子の漏れ出る喘ぎ声「んっ……んあっ……ううっ」

(4)

9 「手の平てのひらに伝わる柔らかな感触、女の子特有の滑なめらかな曲線に、あなたはうつとり
してしまう。胸の鼓動こどうは速くなり、次第しだいに体が熱くなる」

(5)

SE：理紗が手を払い除ける音

9 「指を強く弾かれ、アナタは手を引っ込める」

9 「怯えた女子校生のすぐ横に、鋭い眼光の女の子が立っている。髪はピンクのメッシュ混じりで金髪。ラフに羽織った白衣。内側に着込んだ派手なシャツからは、大きく胸元がのぞき、黒いデニムのショートパンツからは魅力的な足がすらりと伸びている。唐突に白衣姿のエッチな格好のギャルが現れて、

アナタは少し、非現実的な印象を受ける。

その抜群のプロポーションに見とれている間に、アナタは腕を強く掴まれ、

あっさり拘束されてしまう。食い込んだ爪で腕がチクリと痛み、アナタの頭に不意に理性がもどってくる。

痴漢がバレてしまったのを少し遅れて自覚して、
とたんに冷や汗が湧きあがり、背中をぐっしりと濡らしていく」

(6)

4 「(囁く) お兄さん♪ 次の駅で一緒に降りよっか」

SE：電車の扉の閉まる音

(7)

9 「固く冷たい感触が背中から伝わって、アナタは意識を取り戻す。ここがいったいどこなのか、周りが暗くてよくわからない。
ぼんやりする頭に、少し前の記憶がよぎる。エッチなギャルに連れられて電車を降りたかと思うと、アナタは首に何か注射のような物を打たれて……次の瞬間、アナタの体は痺れて動けなくなり、すぐに意識を失っていた……。それが今、思い出せる最後の記憶」

(8)

※ここ微エコーかけるかもしれません
5 「てすてす、マイクテスト♪ 聞こえますか？ お兄さん♪」

9 「頭の中に直接響くような声がして、アナタは何か言い返そうとするけれど、体が痺れて声が出ない」

(9)

5 「んふふ♪ 聞こえてるう？ さっきは手荒なことをしちゃってごめんね♪
お詫びも兼ねて、まずは自己紹介でもしてあげようかなあ。アタシは中谷理紗。
ただのギャルに見えるかもしれないけど、生体信号処理が専門の研究者。
とりわけ筋電義手を発展させた分野が専門なんだけど、
最近では頭を良くするスーツの開発とかも手がけてて……って、
そんなことどうでも良いか♪
ここがどこかわからなくて、きつと混乱してるよね。
ここはアタシのラボ。そしてお兄さんが今いるのは、アタシのつくった

なんと医者いらずで脳移植できちゃう、画期的かつ傑作。

そして自信作の発明品！ の試作品の中だよ」

(10)

5 「どしたの？ 不安そうな顔してるねえ。

そっちらから何も見えなくてもこっちらからはばっちり見えてるんだよ。

脳波のうはもモニターしてるから、だいたい何考えてるかってことまで、筒抜けつつぬけなんだから」

(11)

5 「まあまあ、確かにこれは実験だけとお兄さんのためでもあるんだよ？

お兄さん、かなり性欲溜たまっちゃう方でしょう？ しかも、その性欲を満みたたして、

気持ち良くなるためだったら、多少のリスクを冒しても

構かまわないタイプ。だって、痴漢ちかんって、もしバレたら社会的に死んじゃうのに。

お兄さんは目の前の女の子の魅力に勝てなくて、本当はダメなことなのに。

見ず知らずの女の子の敏感びんかんなところを触っちゃう。無意識かもしれないけれど、

お兄さんはたとえそれが破滅はめつてき的な行為でも、

気持ち良くなるためなら、簡単に欲望へ魂を売り渡しちゃう」

(12)

6 「だからこそ、アタシたちは良いパートナーになれるよ。アタシの試作品の実験に

付き合ってもらう代わりに、お兄さんには、とつても敏感びんかんで気持ち良くなれる体をあ

げる。それは今まで感じたどの快感よりも、ずっと気持ち良くなれる、特別な体。

想像してみて？ もしも自分の体が、指一本で軽く肌を撫なででられるだけで

絶頂する体になっちゃったら。

もしも、風が髪を揺らすだけで、体が快感で痙攣けいれんするようになっちゃったら。

そんな体で、もしも、ただでさえ敏感びんかんな部分を弄もてあそばれちゃったら……。

そんな体で、同時にいろんなところを攻められちゃったら……

気持ち良すぎておかしくなって、壊れちゃうかも♪

けどお兄さんなら、たとえ壊れちゃうかもしれないでも、そういう体になってみたい。そう思ってくれるはずでしょう？」

(13)

4 「ふふ♪ いいんだよ。そう思ってるのはわかってるから。

じゃあ、そろそろ実験を始めちゃおっか♪

といっても、お兄さんは特別なことをしなくて大丈夫。

マシンから流れる私の声だけを聞いて、そこで横になってね♪」

(14)

SE：機械の操作音

SE：ボタンの音

(15)

5 「あつ。なんか緊張してるでしょう？」

技術が進んだとはいえ脳移植はデリケートな手術だからさ、手術を進めるためには脳が十分リラックスしていないといけないんだよね♪

まずは一度、深呼吸でもしようか？

さあ、息を大きく吸って。

ゆっくりはいて。そうそう、そんな感じ。

そういえば、知ってる？

深呼吸って普段からする呼吸とは全然違うもので、

深呼吸するだけでもリラックス効果があるんだって♪

すって。はいて。

ふふ♪ どうかかな？ 少しは落ち着いてきた？

まだ少し緊張が残ってるかな？

じゃあ、さらに緊張をほぐす効果のあるガスをマシンに注入ちゆうにゆうしていくね」

(16)

SE: しゅーっ

9 「甘い香りのガスが、マシンの中を満たしていく。バニラのような、果物のような。体を溶かしてしまいそうなほど甘い香りが、アナタの体を包み込んでいく」

(17)

1 「すってー。深く呼吸をするたびに。はいてー。
むせかえりそうなほど、甘い香りが。

すってー。肺の中へ、しみ込んでいく。はいてー。体の中がどんどん甘くなっていく。すってー。吸い込むほどに。はいてー。体が甘くなっていく。すってー。吸い込むほどに。はいてー。ほんのり気持ち良くなっていく。すってー。吸い込むほどに。はいてー。頭がぼんやりして。すってー。気持ちいい。はいてー。頭がぼんやりして。はいてー。何も考えられなくなっていく。すってー。頭がぼんやりするのが。はいてー。気持ちいい。すってー。気持ちいい。はいてー。気持ちいい。気持ちいい。気持ちいい。」

(18)

5 「ガスを吸うのって気持ちがいいでしょう？ なんだって、このガスを吸うだけで、ひくひくして、イっちゃう人もいるんだから♪

さあ。いい子だから、もっとたくさんガスを吸おうね♪

そうしたらもっと気持ち良くなれるよ♪

さあ、手足にぐぐっと力を入れてみてー。体に残った力を振り絞ふりしぼるるように。

さあ、ぎゅぎゅーっと、力を入れてー。

……そうそう。

さん、にい、いち。ゼロ」

7 「(耳元で息を吹きかける) ふーっ♪」

5 「力がふわっと抜けていく。

力が抜ければ抜けるほど、体にガスが入り込みやすくなっていくからね♪

さあ、もう一度。手足にぎゅうぐうと力を入れて♪

さん、にい、いち。ゼロ」

3 「耳元で息を吹きかける）ふうっ♪」

5 「力がふわっと抜けていく。

体から力が抜けていく。しぼんだ風船みたいに、手足がくたくたになっていく。

けれど、それが心地いい。甘い甘い、クリームみたいに濃厚なガスが、

とろとろと体に流れ込んでくる。全身が、なんだかぼかぼか温かくなって、

どんどん気持ち良くなっていく」

(19)

5 「すってゝ。はいてゝ。呼吸するのが気持ちいい。すってゝ。

気持ち良くてたまらない。はいてゝ。頭の中どんどん真っ白になっちゃうのに。

すってゝ。ガスを吸うのをやめられない。はいてゝ。吸うのが気持ち良くてやめられない。すってゝ。はいてゝ。すってゝ。はいてゝ。アナタは甘いガスを吸うことに、

どんどん夢中になっていく」

(20)

5 「すってゝ。体がガスに満たされて。はいてゝ。幸せな気持ちに満たされていく。

すってゝ。アナタの意識が甘く染まって。はいてゝ。

もう自分が誰かもわからなくなっていく。すってゝ。わからないけど、気持ちいいから。

はいてゝ。ガスの中へと沈んでいく。すってゝ。甘い甘いガスの海へ。はいてゝ。

アナタの意識は沈んでいく。すってゝ。沈んでいく。はいてゝ。沈んでいく。すってゝ。

沈んでいく。はいてゝ。沈んでいく。沈んでいく。沈んでいく。沈んでいく。

沈んでいく。沈んでいく。沈んでいく (FO)」

(21)

6 「ふふっ♪ そんなにとろけた顔しちゃって♪とってもすてき♪
さあ、好きなだけガスを吸ってね、お兄さん♪」

SE: ガスの海

(22)

5 「どうかな？ たっぷりガスは吸えたかな？
そろそろ、お待ちかねの、気持ちいい体になる手術を始めよっか♪
ああ、そうだ、念^{ねん}のため。手術に同意でもしてもらおうかな。大丈夫。

形式的^{けいしきてき}なものだし、この光景^{こうけい}は実験映像として記録してるからね、

ただほんの少し^{うなずく}頷^{うなずく}くだけでいいよ♪

——アナタはこの実験に同意しますか？

——アナタは快感^えを得^{える}るためなら、性別が変わることに同意しますか？

——アナタは快感^{ひきかえ}と引き換^{かえ}えに、全ての人権^{てばなす}を手放^{てばなす}すことに同意しますか？

ふふ♪まあ、聞くまでもなかったよね♪お兄さんはカイカンのためなら
何でもしちゃうんだから。当然、全部に同意しちゃう。
それがお兄さん。それがアナタ。(耳元で) そうだよね？」

(23)

5 「それじゃあ、手術を始めるよ♪途中、
アタシの声が聞こえにくくなっちゃうかもしれないけど、
ちゃんとすぐに聞こえるようになるから安心してね♪」

(24)

7 「3、2、1. ゼロ。あなたの頭に何かが触れる。優しく、柔らかなそれは、まるで、小さな女の子の指のよう」

(25)

3 「3、2、1. ゼロ。やさしい指があなたの頭を包み込む」

(26)

7 「3、2、1、ゼロ。あなたの頭が、ふわりと宙へと浮かびあがる。

それはとても優しくて、少し懐かしい感覚。

ふわふわ♪ ふわふわ♪

頭だけで、空を飛んでいるような、

ふわふわ♪ ふわふわ♪

不思議で、開放感のある感覚。

ふわふわ♪ ふわふわ♪

まるで子供にもどったよう♪

ふわふわ♪ ふわふわ♪

軽くて、どこまでも浮かび上がってしまいそう♪

ふわふわ♪ ふわふわ♪

甘い感覚があなたの頭の中に満ちていく♪

ふわふわ♪ ふわふわ♪ ふわふわ♪ ふわふわ♪

(27)

SE: 次のセリフ、ノイズを入れる加工をします

5 「ふわふわ♪ ふわふわ♪ あなたの脳みそが体から取り出される♪

ふわふわ♪ ふわふわ♪ あなたの脳みそが、意識が、体から離れていく♪

ふわふわ♪ ふわふわ♪ 脳みそだけになったあなたはもう、うごけない♪

ふわふわ♪ ふわふわ♪ あなたにできるのは、ただ気持ち良くなることだけ♪」

(28)

5 「ふわふわ♪ふわふわ♪甘い感覚に包まれたアナタの前に、
裸はだかの小さな女の子が現れる。女の子は目をつむって、
気持ち良さそうに、スヤスヤと眠っている。

銀色の髪、長い睫毛まつげ、水色の潤うるんだ唇くちびる、華奢きゃしゃで小さな手足、色白でツヤのある肌。
そして、その小さな体には少しアンバランスな、大きな胸。
そう、それはアナタの新しい体。新しいアナタ。
敏感びんかんで、少し触ふれるだけで絶頂ふれしてしまうくらい感度良好な、アンドロイド。
それも、セックスをすることに特化した、セクサロイド」

(29)

5 「アナタはその女の子にゆっくりと近づいていく。
その小さな体にゆらゆらと吸すい寄よせられていく。
ゆらゆら♪ゆらゆら♪
引力のように、それが当たり前であるように、女の子に引きよせられていく」

(30)

1 「今からカウントダウンしていきます。ゼロになると、アナタは小さな女の子の
セクサロイドの体に完全に取り込まれ、セクサロイドとして絶頂し、
シャットダウンしてしまいます」

(31)

7 「5」ご

7 「アナタの意識が、女の子の体に吸い込まれて、溶とけていく。
頭の中に小さな光の玉が生まれる」

(32)

3 「4」

3 「アナタの手足の感覚が徐々に戻ってくる。

けれど、それは華奢で敏感で力が入らない、小さな女の子の手足の感覚。
光の玉が頭の中で増えていく」

(33)

7 「3」

7 「敏感な体の感覚が全身から伝わってくる。柔らかな肌が空気に触れるのが、心地いい。

胸にかかる大きな胸の重さが、水色の乳首が揺れるのが気持ちいい。
髪のとたる頬が、ゾワゾワとした快感を放って、

頭の中をビリビリと痺れさせていく。

光の玉が体の中に広がっていく」

(34)

3 「2」

3 「乳首がピンと立ち上がり、お腹の奥がじんじんと熱くなってくる。

変わり果てた股間についた、つるつるとした女の子の割れ目からは、

アナタの意思とは関係なく、とろとろと粘っこい透明な液体が溢れてくる。

それはアナタの愛液^{あいえき}。男だったアナタが、絶対に流すことのない、女の子の体液。それに気づいたアナタは、自分の体が女の子のものになっているのを、強く自覚してしまう。

ちよっと前まで男だったのに。

大きなおっぱいぶら下げてる。乳首^{ちくび}立たせてちゃってる。

ただ横になってるだけなのに、勝手に華奢^{きゃしゃ}な体を震わせて、

割れ目とお腹^{おなか}を熱くして、

とろとろの愛液^{あいえき}こぼしちゃってる。

恥ずかしいのに、恥ずかしくてたまらないのに。

お腹^{おなか}が熱い。割れ目が熱い。

愛液^{あいえき}溢^{あふ}れるのがとまらない。意識すればするほど、どんどん溢^{あふ}れて、こぼれちゃう。男だったくせに、情けないのに、割れ目がどんどんぐちゃぐちゃになっていく。頭の中の光の玉がどんどん大きくなっていく」

(3 5)

7 「1」

7 「きちゃう。何かがきちゃう。大きな波みたいな快感が押し寄せてくる予感がする。男の時には感じたことのない、真っ暗な夜の海のような、何もかもを飲み込んでしまう快感が、すぐそこまできてる。やだやだやだ。怖い。怖い。怖い。この快感に飲み込まれたら戻れない。でも感じたい。もっと気持ち良くなりたい。この先までいつてみたい。そんな恐怖と期待の入り混じった感情が、アナタの頭を支配する。

アナタの複雑な感情とは裏腹に、アナタの体はとても素直^{すなお}で、もうすでに、

迫^{せま}り来る快感を期待して、受け入れようと震え^{ふるえ}始めている。

小さな体が揺れ始める。

頭も腰もガクガクと震え、髪がバサバサと頬に当たりはじめる。
いく、いきそう。もういつちやいそう。すごいのきちやう。

ガクガク揺れる頭の中で、光の玉が、チカチカと点滅を始める」

(36)

3 「ゼロ」

3 「絶頂する。光の玉がバチバチと火花をたてて爆発する。
爆発が巨大な快感となつて

体の中をバリバリと突き破つていく。イクイクイクイク♪
快感の電流がかけめぐつて絶頂する。

体がガクガク痙攣して、細い手足の関節が、人間なら本来曲がらない方向まで捻れて、
引き攣つたように震えている。イクイクイクイク♪

電流が、快感が、頭の中を焼き尽くしていく。

快感が、電流が、アナタの頭の中に押し寄せてくる。

体が痙攣するたびに、快感の波がやってきて、アナタを絶頂させ続ける。

イクイクイクイク♪

頭の中が真っ白になっていく。

イクイクイクイク♪

セクサロイドとしてシャットダウンしちやいそう。

イクイクイクイク♪気持ちいい。気持ちいい。

頭の中がばちばちして、痺れて、痺れて、痺れて。

真っ白に染まっていくのが気持ちいい。

すべてが真っ白に。真っ白に。真っ白になっていく」

SE：機械音

5 「意識が、シャットダウンして、真っ白な世界へ飲み込まれていく。

意識が、真っ白であたたかな海へと沈んでいく。

沈んでいく。沈んでいく。沈んでいく。沈んでいく。沈んでいく。沈んでいく。

沈んでいく。沈んでいく。沈んでいく(EO)」

2 メスガキセクサロイド

(3 8)

SE：システム起動音

5 「体にピリっと電気が流れ、アナタの体が再起動する。
深いところまで沈んでいた意識が、ゆっくりと戻ってくる。
小さな女の子としての体の感覚が鮮明になっていく。

頼りない、細くて華奢な手足。

人間よりもずっと透明感があり、柔らかい肌。

風がなでるだけで、さざめくような快感が走る、敏感な体。

淡い水色をした、透き通るほどに、みずみずしい唇。

アナタは自分の体がセクサロイドになってしまったのを思い出す」

(3 9)

1 「おはよ」

(4 0)

9 「ぼんやりと目を開けると、理紗がはるか頭上からアナタを見下ろしている。

電車の中で会った時よりも、理紗のことがとても大きく感じられる。

アナタは、それくらい小さな女の子の体に押し込められてしまったのだ」

(4 1)

2 「そんないやらしい体で、しかもちっちゃな女の子タイプの、
いかにもマニア受けしそうなセクサロイドに生まれ変わった気分はどう？」

(42)

9 「伸びた指先で少し乱暴に乳房がなぞられ、

アナタの体が大きくビクンと跳ねあがってしまう」

(43)

3 「ふふっ♪ 感度は良好。その下品な太い乳首とピンクの乳輪はだてじゃないね♪
もう少しいじめてあげようか？」

(44)

9 「指先で両方の乳首の先をつままれたかと思うと、一気に強くひねりあげられる。
針で突き刺したような痛みと同時に、フラッシュをたたいたように、
まばゆく輝く快感が、頭の中を強烈に痺れさせていく。

アナタが『やめて』と声に出そうとするよりも早く、

また両の乳首が、爪を立てられ、ひねられる。

何度も、何度も、何度も、何度も、何度も。

ひねられるたび、頭の中でフラッシュがたかれる」

(45)

7 「パシヤリ。パシヤリ。

またたく快感に踊らされるように、身をよじり、アナタはいやらしく胸をゆらす。
逃げ場のない、快感をこらえようと、身のよじりかたを変えてみるけれど、

みだらに乳首は硬く尖って、ひねられる快感を前より強く求めてしまう」

(46)

3 「パシヤリ。パシヤリ。

乳首がねじれ、頭が痺れる」

(47)

7 「パシヤリ。パシヤリ。

フラッシュが頭の中に、女の胸でしか感じられない快感を丹念に焼き付けていく」

(48)

3 「パシヤリ。パシヤリ。パシヤリ。パシヤリ。

体が震えて、息がどんどん上がってしまう」

(49)

10 「ふふ。神経もうまく繋がってるみたいだし、今度は意識の確認をしようっか♪」

(50)

9 「快感で今にも崩れ落ちそうなアナタからぱっと指を離して、

理紗が今度はアナタの髪を優しくなでる。

お腹の底まで火照ってもどかしくなった体が、

撫でられるうちに、少しだけ収まっていく。

頭を撫でられる、優しい快感に包まれて、息が少しだけ整っていく」

(51)

10 「まずは、そう……アナタの名前、ちゃんと思ひ出せるかな？」

(52)

9 「あなたは快感の名残りなごりの中、ぼうつとした頭で、
本当の自分の名前を思い出そうとするけれど、
思い出そうとしたそばから、泡がはじけるように、
それはあっという間に消えてしまう。

代わりに、あなたはなぜか今の自分の名前がエリだということを、
はつきりと、ごく自然に思い出して、こくりとうなずく頷く」

(53)

10 「じゃあ、次の質問♪

あなたはアタシにとってどんな存在？ 自己紹介してもらえる？」

(54)

5 「あなたは、普段の自分のことを話そうとするけれど、うまく言葉がでてこない。
あなたがまごまごしているうちに、あなたの頭の中に言葉が浮かぶ。

『私は、理紗りさ様のセクサロイドです。』

理紗りさ様を望むままに満たしてさしあげることこそが、私の存在意義です』

(55)

10 「よく言えました♪」

(56)

9 「ただ、思い浮かんだだけだと思っていた言葉が口に出ていたことに
あなたは気付く。

しかも、言葉にしている瞬間、あなたはとても幸せな気持ちに満たされていた。
なぜなら、今のあなたは人間ではなくセクサロイドだから。

あなたの体の所有権は、マスターである理紗りさのもの。

話すことも、動くことさえも、理紗の望み通りにしか動けない。

理紗のどんな言葉もアナタには甘い麻薬のように感じられる。

たとえ罵られたとしても、その言葉はアナタをたちまち酔わせてしまう。

理紗の望み通りに動けば動くほど、

言葉にできないほどの充足感と快感が体の芯から湧き上がる」

(57)

7 「(右耳で囁く) どうしたの? エリ。少し表情が硬いんじゃない? もっと可愛い顔をアタシに見せて?」

(58)

5 「唇が耳に触れて、息がかかり、アナタの頬がカアッと熱くなる。

理紗のために、とびっきりの可愛い顔をしなくちゃ♪

胸の奥が締め付けられるような感覚に、突き動かされるようにして、

アナタはとびっきりの甘え顔を理紗に見せる」

(59)

16 「さすが、真優ちゃんのデザインした顔だなあ。

とっても可愛い♪

アタシと真優ちゃんの特徴がちよつとずつ混じってるのが、また素敵。

これがちよつと前まで痴漢男だったなんて、誰も信じないだろうなあ♪」

(60)

9 「アナタが甘えた顔をしている間に、理紗りさの後ろに冷ややかな目をしたセーラー服を着た女子校生が現れる。

アナタはその女子校生を見た瞬間、痴漢ちかんを働いた相手だ、とハツとする。殺意のこもった視線が注がれて、アナタは冷や汗をかきそうになるけれど、セクサロイドの体は、そんなことおかまいなしに、

理紗りさに向かって甘えた顔を浮かべてしまう」

(61)

16 「ふふふっ♪ エリちゃん。紹介しようか。後ろにいるのが、

アタシの彼女の真優まゆだよ。

アタシたちは付き合って長いんだけど、子供ばかりはつくれなくてね。だから、二人の娘として、エリちゃん。君の体をつくったんだよ♪

つまり、君の体はアタシたちの愛の結晶うれしいってわけ。嬉しい？

(囁く)

けど、問題が一つあったんだ。それは、アタシたちは技術はあっても、

人間の感情を完全に再現するエーアイエーアイをつくることができなかった。

だから、エーアイエーアイに持たせる感情の処理を補うおぎなうためだけに、

どうでもいい、この世からいなくなっても問題のない、誰も悲しまない人間の脳みそが必要だったんだよ。

例えば、電車で痴漢ちかんをはたらくような男の脳みそがね♪」

(62)

5 「とても酷いひどいことを言われているはずなのに、

アナタにはそれがとても光栄な意味に聞こえ、甘美な響きかんびに感じてしまう」

(63)

1 6 「さてと。真優^{まゆ}は君とは口も聞きたくないみたいだけど、愛娘がちゃんと動作するかどうかは見てってくれるってさ。つまり、二人のお母さんの前で、これからセクサロイドとしての性能を確かめられるってわけ♪」

(64)

3 「どう？ 本望でしょう？」

(65)

5 「二人の女の子のことを少し怖いと思った瞬間、アナタの心はセクサロイドのプログラムによって、瞬時に書き換えられていく。エリはセクサロイド。理紗^{りさ}と真優^{まゆ}はエリのお母さん。だからアナタは二人のことが大好きで、二人のことを気持ち良くしてあげたくてたまらない。それがアナタにとって一番気持ちがいいこと。大好き、大好き、大好き。愛されたい、愛されたい。愛したい。愛したい。愛したい。アナタは理紗^{りさ}だけでなく、真優^{まゆ}にもとびっきりの甘え顔を向けてみる」

(66)

3 「ん〜♪ いい表情だね♪ エリちゃんは真優^{まゆ}ちゃんママにも気持ち良くなって欲しいんだね？
でもね、真優^{まゆ}ちゃんママは、エリちゃんが元の体のときに電車でエッチなことしたのがまだ許せないんだって。酷いことしちゃったもんねえ。さあ、こんな時はどうしたらいいと思う？」

(67)

5 「そう言われた途端、アナタの中に悲しい気持ちが湧いてくる。
ごめんなさいって謝らなくちゃ、そう思った人間らしいアナタの心が、
プログラムによって書き換えられる。

真優ちゃんママに、たっぷりご奉仕してお許しをいただかなくちゃ。

そんなセクサロイドとしての考えばかりが、アナタの心を埋め尽くしていく」

(68)

3 「うんうん。なるほどね。エリちゃんは、真優ちゃんママを気持ちよくすることで
お詫びしたいんだね。そうだよ。エリちゃんはセクサロイドだもんね。
もう人間じゃないから、そういう方法でしかコミュニケーションとれないもんね」

(69)

10 「真優ちゃん。どう？ 謝罪受け入れてあげたら？」

(70)

SE：近づいてくる足音

SE：蹴り倒される音

(71)

9 「真優のスカートがひらりと捲れたかと思うと、

伸びた足がアナタの体を蹴り飛ばす。

小さくなったアナタの体は簡単に転がって、床にうつ伏せになってしまう。
アナタの体にはなぜか蹴られた痛みよりも、

真優ちゃんママが自分に触れてくれたことが嬉しくて、

喜びと快感が広がっていく。

お詫びにご奉仕できるかもしれない。ご奉仕したい。
したい。したい。したい。したい」

5 「ご奉仕ほうししたい一心で、床から起きあがろうとしたところを、

真優ちゃんママに踏みつけられる。

背中を、腰こしを、頭を、体のありとあらゆるところを

黒いニーソックスを履いた足で踏みにじられる。本当なら痛いくらい強く足を押し付けられてるのに、アナタは真優ちゃんママに踏んでもらえるのが

嬉しくてたまらない。

踏まれることで、真優ちゃんママのお役に立てるのが嬉しくてたまらない。

頬につま先がぎゅうぎゅうと押し当てられる。

少し埃ほこりっぽくて、酸っぱいような、蒸れた靴下の香りが鼻をかすめる。

本当ならあまりいい香りではないはずなのに。

アナタには豪華なお菓子から漂う、気高くも官能的な甘い香りに感じられる。

顔を踏まれれば、踏まれるほど。その香りは強く感じられて、

アナタはうっとりしてしまう。

頬が強く踏みにじられて、背筋を快感が這い上がっていく。

踏まれれば、踏まれるほど。

頭の中が痺れて、自分ばかりが気持ち良くなって、申し訳なくなつて。

アナタはご奉仕したくなる。

踏まれる。踏まれる。踏まれる。鼻を、唇を、容赦無く踏みにじられる。

アナタはたまらなくなつて、真優ちゃんママのつま先をパクリと口に含んで、しゃぶりはじめる。

唾液と蒸れたソックスのあわさった、

ねばっこい極上の甘い香りが口いっぱいに広がって、

幸せな気持ちのアナタの中にあふれてくる。

汚いものを見るような視線を真優ちゃんママに浴びせられながら、

これは罰。これはご奉仕。

真優ちゃんママに気持ち良くなってもらわなくちゃ。

という一心で、アナタはソックスに包まれた、ママの形のいい指先を、小さな舌を使って舐めながら、しゃぶりつくそうと懸命に頭を動かす。

前へ。後ろへ。

頭を動かしながら、口全体を使って、

フェラチオでもするみたいにテクニカルに、

おっぱいに吸い付く赤ん坊みたいに貪欲に、

真優ちゃんママの足をしゃぶりつづける。

しゃぶりつづければ、きっと気持ちよくなってもらえる。

そんな考えがアナタを支配して、頭を激しく前後に動かしはじめる」

(73)

(編集でループさせてこの前後のセリフと被せる予定あります)

1 「(しゃぶる音)

ちゅっ♪んんっ♪れろお♪ちゅばあっ♪んああっ♪じゅるうっ♪

ちゅ♪ちゅう♪ぶはっ♪じゅるうっ♪ちゅばあっ♪れろっ♪ちゅううっ♪」

(74)

5 「しゃぶる、しゃぶる、しゃぶり続ける。しゃぶるほど、ほんの少しだけ、

ママの表情が和らぐ気がする。しゃぶる。しゃぶる。しゃぶるほど、アナタの中に

真優ちゃんママの足のとりりとした甘い香りが染み込んで、

幸せな気持ちになっていく」

(75)

7 「頭の中にぽつぽつと輝く雨が降り始める」

(76)

5 「ちゅぱちゅぱ。ちゅぱちゅぱ。

真優ちゃんママの表情が。

ちゅぱ、ちゅぱ。

だんだん快感をこらえる顔へ変わっていく。

ちゅぱちゅぱ。

ママが感じてくれているのが、

ちゅぱ、ちゅぱ。

震える足の指先から伝わってくる。

嬉しい。嬉しい。嬉しい。

ママ、ママ、ママ、ママ。

甘えるように、許しを願うように。

アナタは足をしゃぶり続ける」

(77)

3 「頭の中で降る雨が、どんどん強くなっていく」

(78)

5 「ちゅぱ、ちゅぱ。

ママ。気持ちいい？気持ちいい？

気持ち良くなつて。

一緒に気持ち良くなる？

ちゅぱ、ちゅぱ。ちゅぱ、ちゅぱ。

献身的にしゃぶるほど、アナタの体はどんどん淫らに熱くなっていく」

(79)

7 「雨が強く激しくなっていく。頭の中に雨がたふたと溜まっていく」

(80)

5 「真優ちゃんママの指先が、ソックスの中でピンと伸びて、小刻みに震え始める。自分の口で、舌で感じてくれていると思うと、あなたは幸福でたまらなくなる。それだけで、今にも絶頂してしまいそう。ちゅば、ちゅば。

ママの指先が震えてる。

ちゅば、ちゅば。あなたの体が幸せで震え始める」

(81)

3 「頭の中いっぱいに溜まった雨水はもう限界、今にもあふれてしまいそう」

(82)

5 「ちゅば、ちゅば。ちゅば、ちゅば。

つま先が喉の奥に突き当たるほど、深く押し込まれる。

氣道が塞がれ、人間だった時の記憶で、息苦しいようにも感じるけれど、あなたはセクサロイドだから、ママの足を深く受け入れられるのが嬉しくて、嬉しくて、嬉しくてたまらない。

体がビクビクと震えて、より深く大きく頭を動かし、しゃぶりはじめる。

ちゅば、ちゅば。ちゅば、ちゅば。

幸せが、快感が、どんどん大きくなっていく。

ちゅば、ちゅば。ちゅば、ちゅば。ちゅば、ちゅば。

ママの足がガクガクと口の中で痙攣する。

いく、もういきそう。いってしまいそう」

(83)

7 「頭の中に溜まっていた輝く水が、洪水となって、一気に溢れて流れ出す」

5 「激しい流れが深い快感へ変わり、全身を強く打ちつける。
絶頂する。絶頂する。絶頂する。

ビクビク震えるママの足をしゃぶりながら、

幸せ感じて絶頂しちゃう。

イクイクイクイク♪

ママの愛液あいえきが太ももを伝って、アナタの顔にびちゃびちゃと降りかかる。

気持ちいい。嬉しいうれしい。気持ちいい。嬉しいうれしい。

頭の中、真っ白になって、髪の毛振り乱して、

腰こしを揺らして絶頂しちゃう。

イクイクイクイク♪

舌の上を感じる足の指の温もりが、愛しくて、愛しくて、

顔にかかった愛液あいえきが、痺しびれるほどに甘くて、切なくて。

それだけで気持ち良くて絶頂しちゃう。

イクイクイクイク♪

頭揺らして、足をしゃぶって、イキ続ける。

イキ続けちゃう。

イクイクイクイク♪イクイクイクイク♪イクイクイクイク♪イクイクイクイク♪ (FO)]

#3 ^{さん}ごほうび

(85)

10「(優しく)へえ、結構頑張ったね。エリちゃん、えらいえらい。

真優^{まゆ}ちゃんママも白目^{しろめ}剥^むいてピクピクしてるから、

多分喜んでくれたんじゃないかな。ほんと頑張ったねえ♪」

(86)

10「エリちゃんが頑張ってくれたから、ご褒美^{ほうび}をあげようかな♪」

(87)

3「(耳元で)いいところに連れて行ってあげる。それまでは、少しお休み」

SE: スイッチを切る音

(88)

SE: 電車の走る音次第に大きくなって場面転換

SE: 足音

16「エリちゃん、三人でおでかけ楽しいねえ♪」

(89)

9「電源が入れられ、気がつくと、理紗^{りさ}ちゃんママと真優^{まゆ}ちゃんママに連れられて、
アナタは電車に寄せられていた。

小さな女の子が着るような、過剰^{かじょう}なほどフリルのついた

ブラウスとスカートを着せられて。

アナタは恥ずかしくて、ママたちの影に隠れるようにして、
電車に揺られている」

(90)

7 「どうしたの？ 緊張してるの？ ま、無理もないか。

エリちゃんは女性専用車両初めてだもんねえ♪

けど、エリちゃんはどこからどう見ても、ちっちゃな女の子だから
恥ずかしがる必要なんて全然ないんだよ♪」

(91)

9 「アナタはママの影から、ちょこっと顔を出して、見上げるようにして、
電車の中を見回してみる。

可愛い女子大生風のお姉さん。美人な^{オイエル}〇さん、

近所の女子校の生徒と思われる、制服姿の女の子たち。

女性だけが集まって、女の子の濃い香りが立ち込める不思議な空間。

しかもよく見ると、それぞれが近くの女の子たちとイチャついている」

(92)

7 「ひそひそと」

この車両ね、今の時間は^{しらゆりれっしや}白百合列車って呼ばれてるんだよね。

今のこの時間だけは、女の子が好きな女の子ばかりが乗り込んで、

……ほら、ああやって、ちよつとエッチなことをしているの」

(93)

1 2 「(キス音) ちゅっ♪んあっ♪んんっ♪」

(94)

3 「(見渡して)

あつ、あのお姉さんなんて、とろけそうな顔して、

こっそり電車の座席を濡らしてる。

あっちのお姉さんは、最近発売されたバイブを手隠して、
どの子に入れてもらおうか物色してる……。

どう？ ドキドキする？

こんな危ない女の子ばかりの電車の中で、

これからアタシたちは痴漢をするの。

そう、エリちゃんの大好きな痴漢。

嬉しいでしょう？ わくわくしちゃうでしょう？

でも、今回はご褒美だから、エリちゃんはされる側かな♪」

(95)

5 「アナタは車両の角に追いやられ、周りに見えないようにママたちが
体で隠してしまう」

(96)

7 「耳元でそそのかすように」

もし声を出して、乗客のお姉さん達にバレちゃったら、
きつと、お姉さんたちみんながエリちゃんを襲っちゃうから、気をつけてね？
それとも、破壊が好きなエリちゃんのことだからすぐに声を出しちゃうかな？
声を出してみんなにぐちゃぐちゃにされたくてたまらなくなっちゃうかな？」

(97)

5 「理紗ちゃんママの指先が、スカートの中に潜り込み、

アナタの太ももをつうつとなでる。

ビリビリとした快感が喉元までのぼってきて、

今にも声を出しそうになってしまう」

(98)

3 「だめだよ？　ちゃんと我慢しなくちゃ。みんなにバレちゃう♪」

(99)

5 「指先が、肌に触れるか触れないかという力加減で、太ももを撫で回していく。

下から上へ。前から後ろへ。そのまま、可愛らしい小さなお尻へ。

円を描くように、お尻が何度も撫でられて、

その度に電気のような快感が走りぬけていく。

頭がぼうつとして、お腹が熱くなり始め、腰が震え、肩が震え、

足は自然と内股になり、そうしなければ立っていらなくなるほどの快感が、

アナタの中に広がっていく。

ただ、お尻を撫でられているだけなのに、

ママにお尻を触られているという事実で、

アナタの体はこれ以上ないほど熱くなる。

熱い。熱い。熱い。熱い。

全身熱くて体が溶けてしまいそう。

熱い。熱い。熱い。熱い。

体が溶けたみたいに、アナタの割れ目から愛液がとろとろとこぼれ始める」

(100)

7 「(耳元でセクシーに) 指、入れるよ」

(101)

5 「ママの中指が、アナタの小さくて毛も生えていない割れ目に潜り込む。本当ならきついはずなのに、すでに淫らな愛液で濡れまくった

セクサロイドの股間は、するりと大人の指先をのみこんでしまう。

その瞬間、ずしりと重い快感が、アナタの頭にのしかかる。

熱くてとろとろになったお腹の中を、指が遠慮なくかき回す。

膣の柔らかで敏感なヒダを内側からごりごりと刺激されて、

今度は跳ね上がるような快感が、アナタの体を突き上げる。

アナタの腰が浮きあがり、短い悲鳴が漏れそうになる。

声を出しちやいけないのに。

これ以上感じたら声が出ちやいそうなのに。

アナタの膣のヒダは、ママの指先にしっかりと絡みついて、離さない」

(102)

3 「(甘く) アタシの指が気に入ったの？ ちっちゃな膣で、

こんなにしっかりと抱きしめて。甘えん坊さん♪」

(103)

5 「指の動きが大きくなり、さつきよりも奥深くまでかき混ぜられる。重くて、深い快感が、海のように広がっていく。

熱い熱いお腹の中が、えぐられるように、深く激しく混ぜられていく。混ざる。混ざる。混ざっていく。

中をかき混ぜられるほど、指とヒダとが溶け合っていく。

熱さと快感が、ないまぜになって、アナタの脳を快感で溶かしていく」

SE：激しいクチュ音

5 「混ざる。混ざる。熱いお腹が混ぜられて。全身が快感でとろけてしまう。

指が動いたびに、体が揺れて、頭が揺れて、視界もぐらぐら揺れてしまう。

いく。いきそう。もういきそう。体の奥から大きな熱い快感が込み上げてくる。
いく。いっちゃう。いく。いっちゃう。いく、イクイクイクイク。

アナタは絶頂して、声を漏らしてしまう」

#4 変態列車

(105)

7 「(なぶるように) あーあ。声出しちゃったね♪

電車に乗ってるお姉さんたちが、こっちを見てるよ？

さっき見かけた銀色の髪の可愛い小さな女の子が乱れた声を上げてる。

ああ、あの子はあんなに小さいのに、

電車でぐちゃぐちゃに愛されるのを求めているんだって、みんなに思われちゃった♪
ほら、お姉さんたちまでエリちゃんのことを求めはじめちゃった。

小さな女の子なんて珍しいから、もうすぐそこまで、お姉さんたちがきてるよ？

ねえ、エリちゃん。みんながアナタを求めている。

こんな時、アナタはどうするんだっけ？」

(106)

9 「アナタは絶頂の名残でビクビク震えながら、甘えた顔をママに見せる」

(107)

7 「(言い聞かせるように)

そう。求められたら、みんなに満足してもらわなくちゃね♪

エリちゃんはそのような道具だもの♪」

(108)

9 「アナタのうなじがママの指で強く押されて、

アナタは自分がセクサロイドだったことを思い出す。

アナタの首と手足が胴体から外れ、意思を持ったように、

近くの女性にすり寄っていく。求められたら求められた以上に満たしに行く。

それがアナタ。

右腕はTOさんに。左腕は女子大生に、両足は女子校生二人に絡みつく。

それら全てに感覚があり、彼女たちの肌着や胸、お尻の柔らかさが、

心地よい感覚となって、伝わってくる。

人間離れした快感に、アナタはうっとりしてしまう」

(109)

6 「真優ちゃんには頭をあげる♪」

(110)

5 「理紗ちゃんママにアナタの頭はひょいと持ち上げられて、真優ちゃんママのスカートの中にしまわれて、太ももの間に頭をぎゅっとねじ込まれる。むっちりした柔らかな太ももの感触が頬に伝わってきて、アナタの頭はそれだけで沸騰したみたいに熱くなる」

(111)

3 「アタシはこっち♪」

(112)

5 「理紗ちゃんママが床に置き去りになっていたアナタの胴体に覆い被さる。ブラウスを引き裂かれ、はみ出したおっぱいを勢いよく吸われる。きゅうっと切ない快感が込み上げるのに、頭だけになったアナタには堪えるために体を振ることさえできない。口を開けて、切なさをこらえるのが精一杯。そんなアナタの顔に、

今度は真優ちゃんママがしつとりと濡れた割れ目を押し当てる。

ねっとりとした甘い香りが広がっていて、誘われるようにして、アナタは自然と彼女の割れ目に舌をねじ込む。

小さな女の子の小さな舌に、脳が焦げつきそうなほど、

甘く痺れる愛液の味が広がっていく」

(113)

5 「真優ちゃんママもアナタが指で犯されるのを見て、すでに興奮してたんだ、とアナタは嬉しくてたまらなくなる。

嬉しくてたまらなくて、舌を突き出し、一生懸命に動かして、真優ちゃんママの割れ目の中をかき混ぜようとする。

と、同時に、理紗ちゃんママの指がアナタの割れ目にもぐりこむ。

理紗ちゃんママの指が、熱くてドロドロになったお腹の中をかき混ぜる。

全身が焼き尽くされるような快感が走り、アナタの舌がビクビクと震えてしまう。

不意に動いた舌に膣がキュツと絡みつぎ、ママの愛液がたつぷり溢れ出す。

理紗ちゃんママが指を動かし、アナタの舌が震え、真優ちゃんママの愛液が、

口の中に注ぎ込まれる。

それが何度も繰り返される。

気持ち良すぎて頭がガクガクと震え続ける。

拷問のような快感が、繰り返されて、

頭が何度も真っ白になる。

やばい。おかしくなる。おかしくなっちゃう。

おかしくなる。おかしくなる。おかしくなる。

頭のどこかで声がする」

(114)

7 「(女悪魔のように)

いいんだよ、おかしくなっちゃえ♪狂っちゃえ♪」

(115)

3 「おかしくなる。おかしくなる」

(116)

5 「アナタの両足^{りょうあし}。つま先が、二人の女子高生の割れ目を指先でかき混ぜはじめる。
彼女たちの熱い割れ目が足の指に絡みつくのが気持ちいい」

(117)

3 「頭の中に雪が降り始める」

(118)

7 「おかしくなる。おかしくなる」

(119)

5 「アナタの右腕。細く小さな指先が、TOさんの大きな胸を揉んでいる。
あたたかで、しっとりとした大きめの乳首^{ちくび}を指先で転がすと、
熱っぽい声を上げてもらえるのが嬉しくて、気持ち良くてたまらない」

(120)

7 「頭のなかに雪が積^{つも}り始める」

(121)

3 「おかしくなる。おかしくなる。おかしくなる」

(122)

5 「アナタの左腕。細い腕が、女子大生のお尻^{しり}の穴に飲み込まれていく。

拡張されて、訓練されたお尻^{しり}の穴の中は、広大^{こうだい}で、滑らか^{なめらか}で。

腕が折れそうなくらい強く締め付けられる。

求められているのを強く感じて、アナタは嬉しくて嬉しくてたまらない」

(123)

3 「頭の中に雪がどんどん積もっていく」

(124)

7「おかしくなる。おかしくなる」

(125)

5「アナタの極太乳首ちくびにママが吸い付く。キャンデイみたいに舌で転ころがされがされて、さつきよりも、さらに切ない快感が湧き上がる」

(126)

7「頭の中が雪でいっぱいになっていく」

(127)

3「おかしくなる。おかしくなる」

(128)

5「乳首ちくびが噛み砕かれそうなほど強く噛まれ、激痛と雷みたいな快感がほとぼしる。

同時に、割れ目に入れられていた指が、内側うちがわから強く爪をたてて、

柔らかいヒダをぐちゃぐちゃと掻かきき鳴なららす。

気の狂いそうな快感が、バラバラになった頭の先から爪の先まで、一気に突き抜け、全身をガクガクと感電させる。もうだめ。おかしくなる。おかしくなっちゃう」

(129)

7「おかしくなる。おかしくなる。おかしくなる」

5 「絶頂する。頭の中の積もった雪が、快感の雪崩^{なだれ}となって押し寄せる。

快感に飲み込まれて、何もかもが、真っ白に染まっていく。

絶頂する、絶頂する。絶頂する。

全身バラバラになりそうな快感が、バラバラになった全身から伝わってくる。

イクイクイクイクイク♪

絶頂する。絶頂する、絶頂する、絶頂する。

真っ白な快感の雪の中に、意識がどんどん埋もれていく。

埋もれていく。埋もれていく。埋もれていく。埋もれていく。

深く、深く。埋もれていく、埋もれていく。埋もれていく」

#5 解除

(131)

SE: 電車の音

8 「お客さ〜ん。おきてくださ〜い。終点ですよ〜? なんだかすごくうなされてたみたいですけど、大丈夫ですか?

え? ママ? って、アタシのことですか?

やだなあ、アタシはこの電車の車掌ですよ。

あ。そうだ。お客さん、ちょっと深呼吸でもしてみませんか?

頭がすっきりするかもしれませんよ?

すって〜。はいて〜。すって〜。はいて〜。そうそう、そのままつづけて」

(132)

7 「(囁く) 今から数を数えていきます。

いつつ数えるとアナタはいつものアナタに戻ります」

(133)

3 「ひとつ。冷静に考えてみましょう。

本当のアナタは小さな女の子だったでしょうか?

セクサロイドだったでしょうか?

本当の、現実の自分自身のことをじっくりとよく考えてみてください。

アナタにはもっと馴染なじんだんだ体があったはずです」

(134)

7 「ふたつ。意識がはっきりとしてきます。周りの匂いや、音を感じ取ってみてください。

自分が今どこにいるのか、ゆっくりでいいので考えてみましょう」

(135)

3 「みっつ。アナタの体に力が戻ります。手足の感覚がもどり、自由に動かすことができます。手を握ったり開いたり、足首を回したり、手足を指先から少しずつ動かしてみましょう」

(136)

7 「よっつ。意識がよりはっきりとしてきます。
もう、アナタは自分のことを全て思い出せます。
今日の予定や明日のことも考えられるようになります」

(137)

3 「いつつ。さあ、目を開けて。アナタはもう、すっかりいつものアナタです。
まだ少しふらふらしたり、動けなかったら、無理はせず、
しばらく横になってみましょう。徐々に元の感覚へ戻っていきます。

動けるようなら、その場で軽く飛び跳ね^{はね}てみたり、
少し冷たいシャワーを浴びてみるのも意識がしゃっきりしていいですよ。
お疲れ様でした」

(138)

16 「お客さん、さあさあ。降りてください。
このまま乗ってたら車庫まで行っちゃいますよ？
ふふっ♪ご乗車ありがとうございました。
またのご乗車をお待ちしております♪」

(139)

SE：電車の音

(間)

(140)

13 「今度はもっと可愛がってあげるからね♪」

(141)

7 「(耳元で) エリちゃん♪」

(幕)